

令和6年1月18日



# 根本正顕彰会 会報

第103号

発行者 根本正顕彰会

「踏まれても根強く忍べ路芝のやがて花咲く春をこぞ待て」

## 目次

- 1 巻頭言（ごあいさつ） 「新年のごあいさつ」 会長 山田正巳 1頁
- 2 ゆかりの地を訪ねる旅（埴町・大子町・旧山方町）（9/24・日）  
（報告・理事 小堀 優） 2頁
- 3 漫画『根本正物語』贈呈式（10/6・那珂市長室）  
（報告・事務局長 仲田昭一） 19頁
- 4 中央公民館展示（10/1～11/30）  
「100年の時を超えてと題し、お里帰り品の展示」（報告・副会長 根本正治） 20頁
- 5 顕彰フェスティバル（10/2・月）（戸多地区まちづくり委員会と共催）  
（報告・事務局長 仲田昭一） 22頁
- 6 公開講座（11/23・木）講師：本会顧問（前那珂市長）海野徹氏  
テーマ「顕彰会立ち上げ時の思い出」 （報告・理事 高畑精一） 33頁
- 7 会員の声  
(1) 「忘己利他」(もうこりた) 秋葉 泉 36頁  
(2) 憧れるのをやめられない～感動をその後の人生に生かした先輩と同輩  
小堀 優 37頁
- 8 編集後記 理事 細貝幸雄 40頁

## お知らせ

- 根本正顕彰会のホームページとYouTubeのご紹介 41頁  
会報でお知らせしきれない諸活動の写真・動画なども是非ご覧ください
- 新年度総会・公開講演会(予定)  
日 時 5月12日(日) 13:30～16:00  
会 場 那珂市中央公民館 講座室  
公開講演会 演題・講師 (未定)
- 会報への玉稿御礼と今後の会報への原稿募集  
ご多用の中、会報への玉稿をありがとうございました。今後も、随時、原稿を募集します。テーマは自由です。ふるってご投稿下さい。(次号は7月発行)

## 新年のごあいさつ

根本正顕彰会会長 山田正巳



会員の皆さま方におかれましては、穏やかな新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。昨年を振り返ってみますと、3年続いたコロナ禍前に戻りつつあるように思います。このように長く続いたのは政府が急激なコロナの蔓延が続けば医療崩壊を招く恐れがあるため、それらの広がりや遅らせようと国民に感染防止策の徹底や外出の自粛をお願いし、ソフトランディングを凶ってきた結果であります。そのため3年もコロナ禍が続いたわけですが、医療の発達が少ない古代日本においては、神や仏にお願いするほか術もなく、全国に国分寺建立の詔（みことのり）を発し、また東大寺大仏の造立を発願して社会不安を鎮めようとしたしました。コロナウィルスは放っておくと生き延びるためさまざまなエネルギーで増殖を続けますが、生存場所を得たと安心した途端に流行は短期間で終息します。しかし、ウィルスは地球や私たちの体の中に住み続け、決して死滅することはありません。いつまた私たちにその牙を向けてくるかわかりません。もう二度と、あの息苦しい生活には戻りたくはありません。各自がこの間の経験を活かし「myスタイル」の生活を確立したいものです。

さて、我が顕彰会の事業も会員の皆さま方のご協力によりまして順調に推移しておりますが、以前のような盛り上がりや少なくなってきたような気がしております。顕彰会に限ったことではありませんが、自治会や各種団体においても加入率の低迷や役員の成り手がいないなど同じ悩みを抱えているのが現状であります。これらの原因の一つに少子高齢化があると思われまます。我が国は、2010年の1億2800万人をピークに2060年には8674万人に減少すると報じられています。今まであった各種団体もこれからは存立が難しく、同じ規模の事業を行うことが困難になってくるものと思ひます。先に述べました通り「密に接する」ことがウィルス蔓延の温床とまで言われていますので、「一堂に会して」というような事業を行うことは少なくなってくるものと思われまます。どのようなしたら会員の皆さまのご意見をくみ上げ、事業として具現化できるかいま問われていると思ひます。

追伸 根本正物語（漫画本）を会員の皆さまに進呈いたします。

根本正生誕150周年記念事業の復刻版です。

令和5年度 根本正顕彰会「ゆかりの地を訪ねる旅」

## 水郡線沿線史跡めぐり（埴町・大子町・旧山方町）

9月24日（日）、秋晴れの下、根本正顕彰会恒例の「ゆかりの地を訪ねる旅」を実施することができた。参加人数が少なかったのは残念だったが、和気藹々と有意義な一日となった。

台風の洪水で壊れた袋田・大子間の鉄橋が復旧した年に計画した本旅は、コロナ禍で2回流れ、昨年度は、偕楽園開設180年に因んだ旅を実施した。3年越しにバス利用による水郡線沿線史跡めぐり（埴町・大子町・旧山方町）ができたことをうれしく思う。

根本正の多くの業績の中でも、水郡線敷設へのご尽力は、特筆すべきものの一つ。令和6年は、大正11年山方宿までの開通から102年、昭和2年の大子駅開設から97年、昭和9年の全線開通から90年になる。「根本正の生き方に学ぶ」を教育の柱としている那珂市の小学生は、今年度、水郡線で大子を訪れる授業をしたとのこと。しかし、常陸大宮駅以北は、かなりの赤字路線として、マスコミ報道されている。令和6年1月27日（土）には、「水郡線マイレール意識醸成シンポジウム」（下記\*参照）が開催される。「私の水郡線」という意識醸成に本顕彰会もさらに尽力したい。

○実施の概況は次の通り 出発8：30～帰着17：30（那珂市中央公民館前第二駐車場）  
道の駅「かわプラザ」

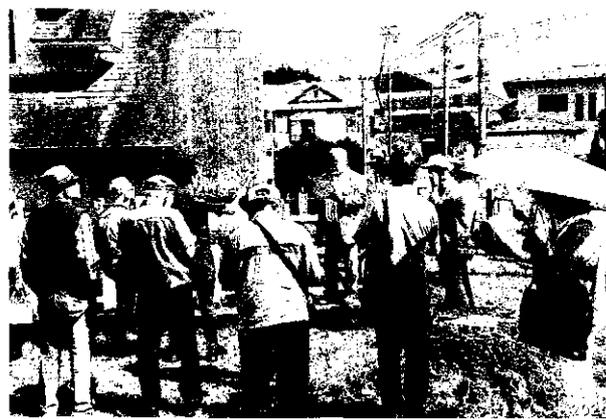
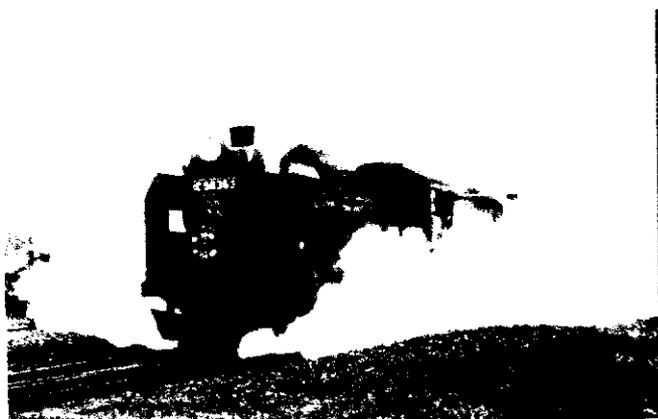
埴町 道の駅「はなわ」 向ヶ岡公園水郡鉄道完成記念碑 田中憲蔵刑場跡碑

昼食（大子町・奥久慈ゆばの里）12：10～12：55

大子町 最初の胸像跡・台座等（大子小校庭）根本正胸像（大子駅前）

旧山方町 山方城跡（御城展望台） 常安寺（五輪の塔、大串無事衛門墓）  
山方宿駅（根本正演説）

各見学地説明は、会長はじめ理事会メンバーで担当した。「学びて時に之れを習う 亦た説ばしからずや」の実践となった。向ヶ岡公園では、地元の元教育長が、地元の熱い思いや整備の状況などを話して下さった。山方の常安寺では、住職の丁寧な説明をいただいた。



（\*）「水郡線マイレール意識醸成シンポジウム」

・令和6年1月27日（土） ・大子町文化福祉会館「まいん」

・主催 茨城県水郡線利用促進会議

（茨城県・水戸市・常陸太田市・ひたちなか市・常陸大宮市・那珂市・大子町）

・協力 東日本旅客鉄道株式会社 水戸支社

# 水郡鐵道完成記念碑

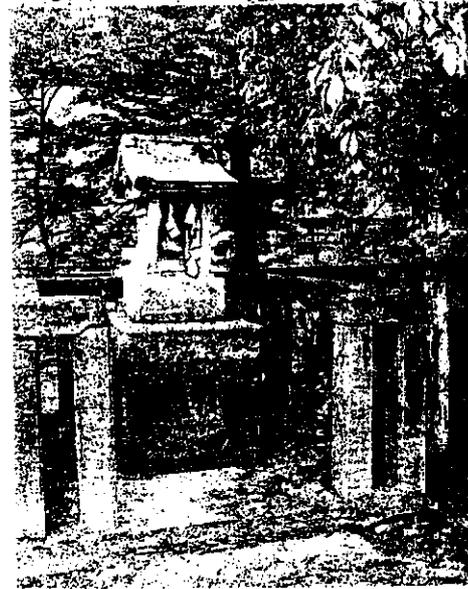
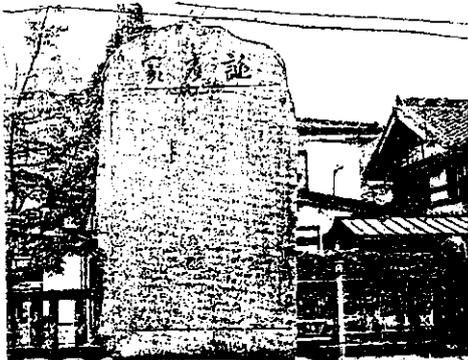
福島縣白川地方ハ古来兩羽及ビ越後ヨリ常陸水戸ヲ經テ江戸ニ至ル孔道ニシテ土地肥沃交通頻繁加フルニ農産林産及ビ鑛物ニ富メル地ナリ然ルニ維新以來明治ノ中葉時代ニ至ルモ交通機關ハ僅ニ中央ヲ貫通スル東北本線ト東海岸ニ沿ヘル常磐線トアルノミニ止マリ縣南地方ハ文化ノ惠澤ニ浴スルコト能ハザルモ茲ニ幾アリ白石禎美君深ク之ヲ慨シ當時北海道選出代議士白石義郎君ト晉議リ自ラ進テ身ヲ政黨ニ投シ東北本線ト海岸線トヲ聯絡スル白河高萩間ノ横斷線ヲ縣南地方ニ求メ其ノ先鞭ヲ著ケンコトヲ企テタリ而シテ君等ノ計畫ハ時機未ダ熟セサルヲ以テ空シク蹉跌ニ帰シタリ君等ノ堅忍不拔ナル失敗ノ爲ニ其志ヲ屈スルモノニアラズ君等ハ更ニ白河高萩間ノ横斷線ニ換フルニ白河水戸間ヲ聯絡スル其後之ヲ水郡線ト改稱シ極力之ガ實現運動ヲ繼續シタリ而シテ君等ノ提出シタル水郡鐵道建設案ハ明治四十五年三月六日ヲ以テ帝國議會ヲ通過セシガ爾來幾多ノ波瀾曲折ヲ經大正十年六月始メテ該鐵道起工式ヲ舉ゲ翌年第一期工程ヲ竣リ令茲十二月全線ノ完成ヲ見ルニ至ルマデ幾ンド有四年ヲ閱シタリ願フニ該鐵道計畫以來前後二十有八年苦心經營ノ結果國家事業トシテ終ニ能ク多年ノ懸案ヲ解決スルヲ得タルモノ畢竟君等地方ノ資源開發ト國民福利ノ増進トヲ以テ己レノ任ト爲シ至誠一貫其ノ始終ヲ全ウシタル功ニ歸セザルヲ得ズ頃者該鐵道完成ノ域ニ際シ有志ノ士兩君ノ功績ヲ追念シテ已マズ碑ヲ建テ之ヲ不朽ニ傳ヘント欲シ之ガ文ヲ予ニ囑ス予其舉ノ世道人心ニ裨益スル所少小ナラザルモノアルヲ嘉シ乃チ其ノ梗槩ヲ叙シ之ヲ石ニ鐫ラシム

昭和九年八月下旬

蘇峰 德富 猪一 郎 撰  
 白雲 山内 貞次 書

(水郡鐵道完成記念碑)

(福島縣東白川郡常豐村・向ヶ岡公園内)



**町指定史跡**

**向ヶ岡公園**

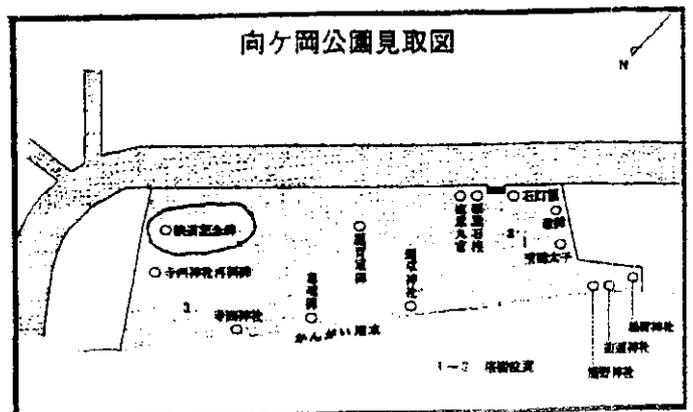
町指定 昭和51年9月21日  
所在地 大字塙字川向道上104

公園とはいえ、現有面積約818平方メートル程で、外部は石垣によって境界を限られている。これは、県指定天然記念物の枝垂桜保護のため整備されたもので、故金沢春友翁の尽力によるもの、南側に県道が開かれた明治18年以前は九ツ山への山続きの岡であった。

この公園は規模こそ小さいが、寺西代官によって、庶民のいこいの場として造られたもの。時に寛政5年(1793)であり、本邦の庶民公園の鼻祖と云うべきものである。

園内には、文政2年寺西代官の最たる治績を後世に遺す誕育家がある。

熊野社があるため、別名熊の森公園という。向ヶ岡とは、塙陣屋から見て名づけたものと、先師は云っている。



## 7 水郡線敷設運動

太田鉄道は明治 26 (1893) 年に創業され、明治 32 (1899) 年に水戸～太田間の全線が開通します。しかし、明治 34 (1901) 年に営業不振のため水戸鉄道に譲渡されました。

一方、明治 36 (1903) 年に福島県白川郡笹原村会議員白石禎美が白萩線 (白河～高萩) を計画して単身で実地踏査をします。その後、鉄道院が平郡線 (平～郡山) を決定する一方で、白石禎美は白水線 (白河～水戸) を計画し、叔父で北海道選出の衆議院議員白石義郎および茨城県選出の正 (両者とも政友会議員) に建設計画推進を依頼しました。その後の水郡線全線開通までの経緯は以下の通りです。

|               |                                                       |
|---------------|-------------------------------------------------------|
| 明治 44(1911) 年 | 根本・白石両代議士等提出の白水線建議案議決<br>9月 14日 鉄道院建設課長石丸重美が沿線実地踏査    |
| 大正 4(1915) 年  | 11月 憲政会内閣誕生、水戸・郡山鉄道建設案否決<br>12月 水戸鉄道が上菅谷～大宮間の私設鉄道敷設申請 |
| 大正 5(1916) 年  | 3月 上菅谷～大宮間の私設鉄道敷設許可                                   |
| 大正 6(1917) 年  | 3月 政友会内閣が復活<br>6月 水戸鉄道が上菅谷～大宮間鉄道建設工事開始                |
| 大正 7(1918) 年  | 水郡鉄道は大郡鉄道 (大宮～郡山間) として可決                              |
| 大正 11(1922) 年 | 12月 10日 山方宿まで開通                                       |
| 昭和 2(1927) 年  | 3月 10日 大子駅開設<br>12月 1日 鉄道省が水戸鉄道を買収し、水郡線と改称            |
| 昭和 5(1930) 年  | 12月 大子町有志が根本正胸像を十二所神社境内に建立                            |
| 昭和 9(1934) 年  | 12月 4日 水郡線全線開通                                        |
| 昭和 43(1968) 年 | 11月 大子駅開通 40周年記念に根本正胸像を駅前に再建                          |

大正 11 (1922) 年 12 月 10 日の山方宿駅開設記念式での正の祝辞は、水郡線敷設に向けた情熱と喜び、関係者への感謝の念がみごとに表現されたものでした。

(以下その一部分)

本線開通式に至りたるは、国力発展のために祝せざるを得ず。殊に茨城、福島両県の実力発展を増進すること大なりというべし。この幸福を得るに至らしめたる



(大子の胸像前で演説する正：根本喜代寿氏提供)

所以のものは、鉄道国有の法律あるが故なり。

ここに第一に感謝すべきは、この鉄道国有を主張せし板垣退助君なり。第二に感謝すべきは軽便鉄道法を成立させた原敬君なり。第三に感謝すべきは明治44年建議の当時、建設部の重職にありたる今の鉄道次官石丸博士なり。石丸君は建議案通過の結果、直に水郡線調査のため出張せられたり。ここに石丸君がいかにかその職務に忠実かつ献身犠牲の仁たるをしようめいするに足る。君が水戸駅前太平館より線路踏査として出立の日は雨降りなりし。君は早朝人力車に乗車、出立の際、雨降りなれば車の幌をかけたる方然るべしと余は車夫に注意したるに対し、石丸君曰く、道中四方の実況を視察することなれば、いかなる大雨といえども幌をかけるに及ばずと。

正は、この他にも地域へ貢献した施策があります。それらは災害の未然防止として高層気象観測所の設置や横利根閘門の建設、村松海岸砂防林の造成などです。いずれも住民の平穏な生活を実現しようとしたものでした。（ゴシック強調は編者）

## 8 おわりに

士分と農民との身分差を痛感していた正にとって、個人的には身分制度を無くし「平等」を実現することは悲願でした。また、幕末における水戸藩内の激しい争いを体験した正にとって、いわゆる「平和」の尊厳を実現しなければならないとも痛感していました。それはやがて、『政見』（大正6年発行）の中にある「国際協調外交（いわゆる幣原外交）への賛意」となって表れました。その実現には種々の問題もありましたが、根底には「世界の諸民族は平等である」との考えがあり、それ故に互いの独立を認め合わなければならないとの信念がありました。

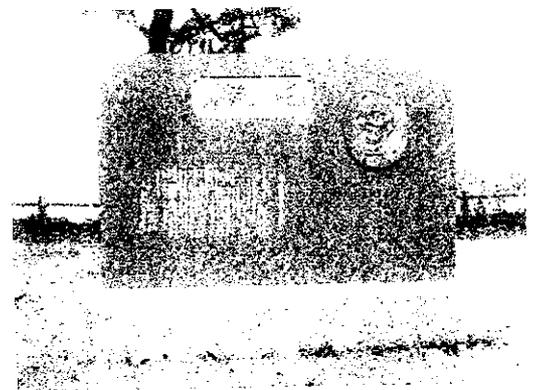
世界的視野を持った国家観、健全な国民の育成という大所高所からの施策を提言すると同時に、地元の発展・繁栄を期した施策の実践に努めた理想的な政治家であったといえましょう。

墓所は、東京青山墓地と生誕地那珂市東木倉の根本家の墓所にあります。

平成13（2001）年には那珂市役所前にある一の関ため池親水公園に根本正顕彰会により顕彰碑が建てられました。



（根本家墓所の正・美倫父子の墓）



（根本正顕彰会によって建てられた顕彰碑）

# ほろの歴史通信

## 「根本正胸像」の台座

本町の百段階段をあがり詰めた左側（だいが小学校校庭の一角）に、胸像のない根本正の台座がある。胸像は、大東亜戦争時、兵器製造のため「金属回収令」により回収され、台座が残された。台座は、礎石、塔柱、笠石からなり、笠石と礎石は八溝石、塔柱の石は押川の西方宇津保沢から採石した自然石を利用して造立されている。根本正の顕彰にふさわしい郷土の資源を利用した重量感のある記念碑である。

根本正は、那珂町（現那珂市）東木倉の生まれ、明治十三年（二八八〇）から二十六年間衆議院議員を務め、未成年の禁酒禁煙、義務教育無償化、水郡線の全面開通に尽力した人である。明治四十四年（一九一〇）、第二十七国会に根本正代議士や福島県塙町白石禎美らによって水郡線敷設案が提案された。水郡鉄道が国会を通過して建設されるまでには、紆余曲折があったが、大正九年（一九二〇）原敬内閣の時予算案が成立し、大郡線として工事を開始、大正十一年常陸大宮―山方宿間、大正十四年山方宿―上小川間、昭和二年上小川―常陸大子間が開通した（注：同年十二月水郡線と改称）。

昭和三年石井栄次郎（大子）、神永秀介（佐原）らを中心に水郡線開通に努力をした根本正の事績を永久に残しておくために、根本正胸像建設の話が持ち上がり、昭和四年に根本正胸像建設会が設立され、昭和五年（一九三〇）一〇月に胸像が建立された。胸像については、当時の彫刻家の大家・大熊宏氏に鑄



建立時の胸像



現在残っている台座

造を依頼。大熊氏は靖国神社の大村益次郎銅像の制作者としても知られた彫刻家である。（注：大村益次郎は蘭学、西洋兵学者。明治政府の兵制の大改革に当たった）

碑の正面に、当時の鉄道大臣元田肇の漢詩が刻まれている。

水郡鉄道正全通 百貨輸来一瞬中

料識吾兄帝微笑 山溪到处入春風

碑の右側には、根本代議士自筆の和歌が刻まれている。

国の為鉄をもとかず真心に

なぞならざらむくろがねの道

胸像の右側には、記念碑建設に関わった役員名、各町村別委員名、水郡鉄道記念碑寄付者の芳名を刻んだ石塔が建立されている。記念碑建設に関わった役員、委員は、次の人たちである。

### 《記念碑建設役員》

- ・ 総 裁 神永 秀介
- ・ 副会長 外池鉄一郎
- ・ 会 長 石井栄次郎
- ・ 会 計 菊池信太郎
- ・ 願 問 石井鉄太郎

### 《各町村委員》

- 大子 小崎 儀平 川口 利吉 川口 利作 大藤 保
  - 永瀬三四郎 黒崎甲四郎 野内 成一 益子有造
  - 松浦重太郎 皆吉 賛 益子善治衛門
  - 佐原 石井 覚一 吉成 賢
  - 依上 吉成 俊夫
  - 宮川 菊池 一也 菊池 雅雄 齋藤勇之介
  - 黒沢 飯村 紀一 松本 元永
  - 袋田 野内 武安 桜岡 一郎
  - 上小川 石井利之介 川井 謙吉 ○生瀬 瀬 石井 善蔵
  - 下小川 神永道之助 小室順太郎 ○諸富野 三次 進
- 建設地としては、大子駅前広場が予定されたが、鉄道省の許可がないため、第二の候補地である十二所神社前の駅を見下ろせる現在の高台の地が選ばれた。

（小澤）

## 大子町に於ける根本 正代議士の挨拶

理事 高畑 精一

遡ること昭和5年12月7日大子町に於いて、水郡線鉄道建設を記念して記念碑除幕式が挙行され、臨席された代議士 根本 正の挨拶の様子が『微光八十年』（石井良一氏著）に掲載されておりますので、その挨拶全文を紹介いたします。

### 水郡鉄道建設記念碑除幕式挨拶

根本 正

諸君、今日は水郡鉄道記念碑除幕式に御招待を受けまして、眞に私の光栄、何とも御礼の申上げ様も御座いません。

神永総裁、石井会長、外池副会長、其他委員諸君が、非常に御多忙の中をも厭わず、献身犠牲の精神を以て御尽力下さいまして、四方幾多の名士諸君が御賛成御助力下さいましたこと、又大子町公園に記念碑が建設せられた事は、深く私が感謝するのみならず、本碑作成者たる大熊氏廣君も喜ぶことと信じます。

水郡鉄道線路中、殊に保内郷は天下の佳景を有し、久慈川兩岸の絶景は遥かに耶馬溪に勝り、又私が会えて岐阜県に参りましたとき、木曾路の山川の美景を見まして、之れは京都の嵐山に百倍せる奇景と賞したことがあります。此の二つの美景よりも、今日此の水郡鉄道開け、常陸山形より福島県東館間を汽車中より見渡しますと、其の実況を証明するに足ると思ひます。其の一例を述べますれば、久慈川の清き流が浅瀬の岩石に波濤の花と散る見事さを見ると同時に、其の音響は恰も天興自然の音楽を耳にするを得、之れ他郷に比類なき愉快の佳景であります。而して此の鉄道を利用し、地方の発展を聞きまして、実に国力振興の一と喜びます。夫れは私が先般東館開通式に参ります途中、上小川駅より同車したる齋藤勇之介君は、五六里先の宮川村より毎朝三時に起き牛乳を鉄道にて自ら持参販売するとのことを聞きまして、鉄道も斯く利用されるならば、国力は発展すると思ひました。又其の時の御話に、此の山中の生活費は一日平均拾五銭である。此の生活費を向上するには此の鉄道を利用するに限る。故に此地方では、近来養鶏事業を副業に奨励し組合を組織し、毎日数千萬個の鶏卵を輸出するに至りましたことを聞き、私は大に喜びました。斯の如く地方発展指導の賢策は、単に齋藤君に止まらず、各位諸君が大に御尽力のことと確信欣然音のみならざること御座います。栗の殖産なぞも、後来輸出せば、米国にて大に之を歓迎する模様です。何となれば、従来米国は、栗を伊太利より輸入せしも、日本栗は十日間早く賣入るを以て、日本産の多量を希望する由であります。

抑も、本鉄道は、明治四十四年の建議にして、長さ八十三哩、予算は最初約八百萬円なりしも、二十年後の今日完成の期に至りては、約千三百萬円の巨額にのぼる一大事業であります。今日本線建設記念の式あるその根本を一寸申上げますと、之は決して私の力でな

く、諸君皆様の御尽力の結果であります。私が二十六ヶ年間、帝国議会にありて種々の法律を提案しましたが、之れ皆諸君の御力であります。特に鉄道に付きましては、尚一言せば、米国のグリフス博士が先年東京青年会にての演説中、明治初年築地のフルベツキ博士の家は、太政官の支局の如く、常に内閣参議諸公が参り、種々の相談があり、其の時鹿児島出身の大久保参議は、青森より長崎まで向ふ百年間、利益配当なくも、鉄道を架けねばならぬと申された偉人であると、古き記憶を語られました。此のグリフス博士は、明治二、三年の頃、福井県へ調練の教師として雇はれた人で、帰米後、日本に関する有力なる著書が澤山あります。又元田前鉄道大臣の父君元田直君は、今日の内閣書記官長の如き大史の職に在り、明治四年の著書東京土産と題し、其の本の中に、鉄道公債は国債を減ずと、如何にも先見抜群の言を遺されました。今日水郡鉄道の出来ました理由は、是等先輩の真理を実現せんため先見ある板垣退助伯は鉄道は国有にし、国力平均発展の議論を主張し、之を議院に法律として提出せしめ、其の結果、国有となり、之を政府当局者として実行したるは、西園寺内閣にして、国有鉄道には既に第一期線第二期線と法律を以て規定せられ居りたる故、更に新設は出来ぬ筈でありました。然るに原鉄道院総裁は、政治は時勢に順應せねばならぬとの卓見を有し、特に軽便鉄道法を提案制定しましたから、私は直ちに之を実行せんと、福島県出身にて北海道選出議員白石義郎君と共に、水郡鉄道建設を企画し、茨城福島両県の交通機関を完成せんが為め、再三再四議院に之を提案し、奮闘した譯であります。

諸君、御承知の通り、大子町の如きは、東西何れも二十哩行かねば鉄道の便なく、即ち奥羽常磐両線の間四十哩あると云う譯であります。此外建設すべき理由は澤山ありますが、福島県選出議員石射文五郎君の話に、千百年前八溝山地方には金山ありしと大日本史に書いてあると申された。又袋田の櫻岡力君は、佐竹時代に保内郷に七ヶ所の金山ありと申された。此の外私は山林を調査して見ましたが、官私林合計七千町歩が此の鉄道の便を得ることとなります。是は紀州橋本町へ演説に参りましたとき、紀州高野山の官林四千町歩が、鉄道の為め毎年四十町歩づつ伐木植付け百年目に一度づつであります。故に水郡鉄道を開けば、毎年七十町歩づつ伐木利益を得ることになります。

本線鉄道建設に付きまして、地方有志諸君が献身犠牲をほらはれ、益子大子町々長を初め其他諸君が東京へ出張せられ、政府及び私共を鞭撻せられたる良結果に外ならず。茲に感謝すべきは、故石丸鉄道次官であります。此の仁は風雨を冒し、鉄道線路を調査し、その時一週間同伴したるは櫻岡力君であります。其他福島県選出議員川口誠三郎君、石射文五郎君の如きは實に、非常なる熱心尽力家にて、私と共に水郡鉄道の完成を期し、郡山市に於いて再三再四演説会を開きましたこともあります。今尚是等の事は、昨日の如き心地致します。茲に今日御多忙中をも御繰合せ御来会の諸君に対し深く御礼を申し上げ、益々諸君の御健康を萬歳に祈ります。

# 「大子の歴史散歩 第2回」

## 水郡線建設と根本正



▲ JR常陸大子駅前ロータリーに立つ根本正の胸像  
(平成11年6月21日撮影)

水郡線常陸大子駅前広場の中央に、駅舎を背にしてプロンズの胸像がある。これが根本正の像である。

根本正は、嘉永四年（一八五一年）、那珂郡東木倉村に生まれ、明治十二年（一八七九年）、二十九歳の時渡米、苦学して、パーモント大学を卒業、キリスト教と合理主義の精神を身につけ、明治二十三年に帰国した。根本は、政治家を志し、二十三年、二十七年の落選の後、三十一年に当選、以来大正十三年（一九三四年）まで二十六年間衆議院議員として活躍する。

明治三十二年に「国民教育授業料全廃の建議案」を議会に提出、可決。どんな子供でも教育を受けさせるようにしなければならぬと、近代日本の教育発展に貢献した。小学生の教育費が国庫の補助を受ける以上、その小学生

がタバコを吸い、酒を飲むことは健康に害があると、明治三十二年に「未成年者喫煙禁止法案」を議会に提出、可決。「未成年者飲酒禁止法」は、二十三年間を費やして大正十一年に可決した。水郡線建設については明治四十四年建議案を議会に提出するが難航し、国の事業として決定するまで、実に十年間を費やした。

なぜ、根本正は、水郡線建設に情熱を燃やし続けたのであろうか。

建議書には、鉄道により、大子地方の葉タバコ、コンニャク、大麦、和紙など農産物の輸送をはじめ、八溝山一帯を中心に産出する木材、木炭、薪などの輸送が可能になり、商工業の発展に利することと誓わめて大きいと述べる。現在は車社会で、高速道路が人間生活の動脈的働きをしているが、その当時は鉄道がそれに代わるものであった。

これを当初から国有として建議したのは、私設資本にまかせる限り、片田舎のあまりかえりみられない所は、いつまでたつても建設をみず、発展をみないという不合理に対処する、根本の「神はかたよらず」という信念であった。

太田線の水戸太田間（一九・六キロ）は明治三十二年四月に開通しているが、山間地帯でトンネルや橋を多くつくらなければならぬ曲りくねった水郡線は難工事の連続であった。上管谷大宮間は大正七年、大正十一年に山方宿まで、大正十四年に上小川まで、昭

和二年三月に水戸大子間（五五・六キロ）が開通する。

当時、大子の地に汽車が走るなどはおよそ夢想だにもしなかつた。ここで、汽車に乗りつうと思えば北は白河、南は大田、西は西那須から氏家と、ここに出るにも大変だった。この山奥の町に汽車が走るというのだから土地の人にとって、その驚きと感激は大変なものであったという。

昭和五年に大子東館間が開通、茨城県内での全線開通を記念して根本の胸像を十二所神社境内（現大子小学校校庭）に建立する。

碑文には、根本の「国の為め 鉄をもとかす真心に なそならざらん くらがねの道」の歌が刻まれている。昭和八年（一九三三年）、八十三歳で根本が死去するが、その翌年、昭和九年に水戸郡山間（二四二・三キロ）の全線が開通する。鉄道の開通は、大子地方と、東京をはじめ水戸、郡山などの各都市との結びつきを深め、各駅では、背後の森林や農産物と結びついて、大子地方発展の要因となった。

胸像は太平洋戦争中の金属回収によって姿を消すが、昭和四十三年に大子駅開通四十周年を記念して再建（常陸大子駅前）された。碑文に、「国を愛い郷土を愛した先生の英姿を万人の仰ぎ得ることとなった。先生の高德偉業と後世の人士の報恩の至誠を永遠に伝えることとした」と刻まれている。

## 回 西金駅の開設

大正八年に水戸から大宮まで、汽車が通るようになった。やがて、奥久慈を縦貫して郡山まで開通すると決まった時、沿線の人々は狂喜して躍り上り、明るい気分になった。大正一〇年（一九二二）いよいよ大宮以北の実地測量が開始された。最初の予定駅は、山方宿駅から上、下小川駅、袋田駅、太子駅で、路線が西金に入ってから小学校裏坊屋敷から西金宿の上の畑を通り新畑口駅が設けられることになった。ところが測量の結果は、盛金の川原の真中（当時）に下小川駅ができて次の駅は現在の上小川駅と決まり、西金は素通りになるとわかったのは、この年の一〇月であった。夢にも思わなかったこの変更は、西金の区民は色を失ってしまった。幾度か区民の会合を開いた結果、西金宿、寄居、橋下、湯沢、それに上小川村の川下、新畑の住民たちは一致団結し、西金駅の設置を目指し一斉に立ち上ったのである。早くから鉄道の誘致に努力していた神長道之介、小野瀬英、村長小室隆を中心に、村の有志、壮青年団代表は、幾回となく上京し倦むことなく鉄道当局に陳情したが、わずか四里の短区間に新駅を設置することは絶望に近かった。そこで更に石井三郎代議士（久米村）同じく水郡線建設に尽力した根本正代議士（後台村）、大津淳一郎貴族院議員（高萩市）に依頼して猛運動を続け、ついに大正一一年七月三日西金駅増設が承認された。しかし駅の指定場所は狭隘なので、県道を付け替えなければならなくなり、畑二四歩、田七畝一五歩を買収し、県の許可を受けて県道の付替工事を行なった。この工事には西金及び盛金の内野、上原、黒丸、上小川村の新畑、川下、諸富野村の北富田の各地区民が総出で手弁当で労力奉仕をした。この時の労力奉仕者数と寄付金は次のとおりであった。

|       |          |       |
|-------|----------|-------|
| 労力奉仕者 | 西金区民二五〇戸 | 二六六二人 |
|       | 他村       | 二九四人  |
| 寄附金   | 西金       | 三三〇〇円 |
|       | 他村       | 一四八円  |

このようにして西金駅は大正一五年（一九二六）二月二日開通したのである。区民の喜びは筆舌に尽くせないものであった。この日は、空前の多彩な催しでにぎわった。この不没転の事業を記念するため昭和三年九月「感謝之碑」が西金駅前に建てられた。その碑文は次のとおりである。（略）

（山方町史より）

天狗党・田中隊百五十回忌法要記念誌

『田中隊長 田中愿蔵を偲ぶ』

生きては忠義の

人となり

死しては忠義の

鬼とならん

田中愿蔵自筆

(処刑された後、懐中から発見された)

(埴野安楽寺作)

# 田中愿蔵の信念と勇氣ある決断

田中愿蔵は弘化元年（一八四四年）常陸太田市水府町の猿田玄碩の次男として生まれ、愿蔵二才の時、水戸の下屋敷に移る。父は水戸藩主徳川斉昭に見出されて藩医として仕えた。六才の時、原忠寧が主催する菁莪塾に入る。のちに水戸弘道館で学び、さらに江戸の昌平坂学問所（のち東京大学となる）で儒学者安井息軒に師事し、儒学・兵学などを学んだ。その時の学友が藤田小四郎で勉学を共にした。のちの天狗党挙兵の仲間となる。

一八六二年、水戸藩主徳川慶篤に随伴して上洛（京都）、京には時局の勉学に奔走し、軍学に深い備前（岡山県）の藤本鉄石の門下に入って学んでいた。藤本はのち倒幕の先駆者として天誅組の変（一八六四）に参加、大和の五条代官を襲撃したが、失敗戦死した。

田中愿蔵は十九才にして帰郷、安井息軒の推薦により時雍館（野口郷校）の館長となり子弟教育に努力精進した。

一八六四年、水戸天狗党の筑波山挙兵に藤田小四郎と共に参加した。田中愿蔵は奇兵隊長として軍資金調達に貢献した。

（当時の水戸藩は諸生党・天狗党の内紛、幕府の内政干渉の強化により混乱の極みにあった。）

天狗党は日光に出向き、日光にほど近い太平山に陣を置いた。そこで、田丸総帥は天狗党が挙兵した大義名分の施政方針を発表した。その綱領の骨格をなすものは「尊皇攘夷と敬幕」という水戸学の理念そのもの「天皇を尊び、幕府を敬う」の内容に終始し、挙兵にはあいまいな声明だった。

徳川幕府を倒すという倒幕の精神はみられず、同志の中から反対攻撃する声が起こり始めた。今まですべてに寡黙を守ってきた田中愿蔵は藤田小四郎の水戸に戻る提案に敢然と反論した。

「先君烈公の御遺志を奉体し、大義を唱え、天下に魁けて義旗をあげ、檄を四方にとばして換氣して参つたではないか、しかるに、家族の安危が気にかかり、陣をはらつて水戸へ帰えれなどとは笑止千万。我等は、草鞋の紐を結んだ時から親兄弟妻子と別れ、家を捨て、我が身を草むらの露に果てる覚悟で参じているもの、素願貫徹のためには尚一層の力を合わせ、進んで倒幕の道をひらかねばならん」と、田中愿蔵は心にたまっていたものを一気にはきだした。何が挙兵の目的かと激しく詰りあくまで倒幕を主張した。公の場において、誰もが口外したことの無い「倒幕」という言葉、藤田小四郎は、『倒幕などは名分にもとる暴論であり、幕府を蔑ろにするものである賊徒の方便よりお粗末なことだ』と、怒った。尊皇敬幕の田丸、

藤田らとの間に激しい論争があつた。論争は『尊皇敬幕』と『尊皇倒幕』の天狗党を二分する決定的な要因となつた。

千名余の兵馬と武器を備えて幕府に立ち向かう以上、それは完全なる謀反であり、それでもなおかつ幕府を敬い、深く恭順いたしますというのではあまりにも矛盾した論理であり、大義とは名ばかりで、不徹底極まる筑波山拳兵といわざるを得ない

田丸の筑波勢と決別した田中愿蔵は、同志三百余名と別行動をとつていた。田中愿蔵は一隊を率いて、各地で「尊皇倒幕」を呼び掛け遊説をつづけた。

幕府では、天狗党は謀反の気ありと、水戸藩への内政干渉を強化、若年寄田沼玄蕃頭意尊が総指揮を執り、幕命により天狗党の取締りを強化した。北関東・南東北の各大名に領内において軍資金等の調達に協力しない追討令を出した。そのために天狗党も田中隊も軍資金調達に深刻で、いろいろな問題が生じた。田中隊に加盟するには頭髪をばつさり切り落とし、その髪を束ね決意をした。今までの武士のしきたりになかつた自由奔放な風体から田中隊は断髪隊又は『ザンギリ組』と呼ばれた。見方によれば、「四民平等の理念」とも言えよう。旗本武士のような格式ばつたおごりと、伝統というものがなただけに、『尊皇倒幕』・『四民平等』の実現に共鳴して入隊を志す若者が後をたたず、田中隊の人数は増大した。(ザンギリ頭は長州藩の高杉晋作が組織した奇兵隊と同様に↓世直し的な要因)

田中隊は軍資金調達に苦勞しながら筑波町に宿営し、火事の実情を田丸総帥の使者に説明、犯人が次の間に控えているので、貴殿から直接詰問くださいと勸めている。これが栃木の火事の実情であることを強調した。のち田丸の筑波勢から「烈公の神位を護持している我等こそ、天狗党の本隊であり、田中愿蔵が如きは諸国浪徒の集団であつて我等筑波の本隊とは一切関係のないことである。」と、田丸の筑波勢からこのような流布されていたため、近隣の役人や豪商の中には、田中隊を無視したり、村々では自警団を組織して立ち向かつてくる始末となつた。田中隊は野口村に本陣を置き、しばらく滞陣することにした。野口村では名主はじめ村ごとあげて田中隊をもてなしてくれた。これも館長時代に培つた田中愿蔵の人情にあふれた人徳施政のなすところであり、村の人たちは、危険を承知で田中隊の一行を受け入れてくれたのである。田中愿蔵は野口村に滞陣中は、隊を参謀の土田と今瀬に任せ、西に東に馬を飛ばして時局の把握に走つた。江戸、或いは、攘夷騒乱の元凶である横浜まで足をのばして夷人の村を密かに偵察したともいわれている。

田中愿蔵が野口村に戻つてみると、意外な報せが待つていた。田丸総帥は、天狗党より田中愿蔵を除名処分にすると発表した。筑波勢からの除名を知つた田中愿蔵は動揺もしなかつた。田中

隊の士気をますます鼓舞し『倒幕あるのみ、我等はその栄光の先鞭たらんとなるものである大義の先兵となつて倒れることはもとより本望である』と潔よかつた。筑波勢は「放火、掠奪、金穀を押借し、人心を乱して恐怖におとし入れ、乱暴の限りをはたらいっているのは田中愿蔵率いる乱暴者たちである。我等筑波勢はわずかの難題も行なつていない。白日のもとに潔白である。」と、一方的に大なる宣伝を行い、田中愿蔵をして、一切の悪人に仕立てあげたのである。さらに、この時期は、まだ倒幕運動は本格化しておらず尊皇攘夷運動が盛んで、一八六四年上旬、第一次長州征伐で幕府が勝利し、幕府の権力を西国諸藩に見せ付けた、このような時、どこよりも先に、天誅組・但馬生野の二の舞にならないために、もつと兵馬を固め、武器を備えて堂々と幕府に見参すべきと倒幕を訴えた。

倒幕運動は一八六七年来薩摩・長州等により本格化するが、関東・東北は幕府の影響力が強固であり、水戸藩は御三家で五代将軍慶喜の出、水戸学の本家であることから倒幕運動などは危険視され受け入れられなかつた。しかし、田中愿蔵等の倒幕運動は時期尚早だったが、この運動が三年後に実現し、明治維新建国に大きな影響を与えたことは事実である。

維新政府が会津戦争の際、棚倉に本陣を置いて総指揮官をとつた板垣退助は棚倉に入る前に、塙の向ヶ岡公園に数百人の兵隊を整列させ、田中愿蔵等の墓に最敬礼し、倒幕運動を讃え、棚倉へむかつた。板垣退助は棚倉の陣に居る間、再三田中愿蔵等の眠る安楽寺の墓に墓参に来たと記されている。

田丸の筑波勢の中には、諸生党・幕府追討軍と激しい戦いが展開される中で、太平山での大論争事件で、田中愿蔵が「諸生党などに目を向けているとき時ではない。小異を捨て、今こそ幕府に立ち向かう好機到来であると」主張したことが、筑波勢に戻つた人々に中に、今にして反省してみれば、やはり田中さんの言われたことがまさに正道であり、天狗党拳兵の本懐であることを痛感した。大義に向つて突進する田中愿蔵の信念に敬服した。のち、筑波勢から数百人が分裂することとなつた。筑波勢にとっては大きな痛手となり氣勢をそがれた。

幕府追討軍総指揮官田沼は関東・東北の諸大名に天狗党壊滅を命じた。水戸城攻防をめぐつて諸生党・天狗党の対立の激化、国中は東も西も騒乱の渦中にあり、幕府としても極めて困難な状況にあつた。天狗党も追討が激しくなり、各地で戦いが繰り広げられた。十月那珂湊に追い詰められ、「今、諸生党・幕府追討軍と戦つて全滅するより、西上して京都にいる一橋慶喜公に我等の真意を訴えよう」と提案した藤田小四郎に従い、那珂湊を荒々しく脱出した。

その頃、田中隊一行は諸生党と天狗党の権力争いを偵察しな

し

# 御城 (みじょう)

## 1 どこに

国道118号の山方バイパスを北上すると右手に久慈の清流、正面に城郭らしきものが見えてくる。御城展望台である。このトンネル上の高台が御城である。旧山方町山方の北端にあたる。

御城展望台は、昭和63年に作られ、山方氏の分家子孫寄託の史料等も展示されている。

## 2 どんな

下の「高館、御城址略図」を見ると、東から西へ本城、中城、外城の三郭が並び土塁と空濠が巡らされ、北、東、南は崖に囲まれている自然の要害の城址である。水戸城を連想させられる。大きな違いは、外城の空濠を挟んだすぐ西に険阻な高館山が控えていることだ。この高館山にも土塁、空濠が構築されている。城主は本城、中城に住み、家臣達は外城、下級武士は南崖下の根古屋に住まいした。

根古屋前の皆沢川に嘆願橋が架かっている。一般人はここから中には入れず、嘆願等は橋の手前で役人に取り次ぎを頼んだ。

## 3 だれが・いつ

最初に、だれが・いつ構築したかは定かではないが、佐竹氏の勢力拡張と領土保全のための出城として重要な地であったことは間違いないだろう。

地名が山方であることからしても、応永年間から慶長7年の佐竹氏秋田移封までの約200年の大部分を山方氏7代が御城の館主であったことの意味は大きい。大部分というのは、山入の乱対策で主君筋の東政義が一時御城に入ったためである。山方氏が一族を挙げて秋田に移り、水戸徳川氏の就封と同時にこの御城は廃された。

## 4 山方氏について

関東管領家上杉の一族で、憲利の時、美濃国山方郡を領し初めて山方氏を称した。その子盛利は、ある殺戮後、上杉憲定にかくまわれていた。

その憲定の子である上杉竜保丸(義憲)が、太田の佐竹義盛の養子となり常陸に下向した。その際、山方盛利が義憲の傅役・後見人として太田に来て佐竹の重臣に加わり、御城の館主に封ぜられた。常陸国山方における山方氏は、この盛利を初代とし、俊則、俊治、国利、定利、篤定、重泰まで代々能登守を称し佐竹宗家のために忠勤を励んだ。

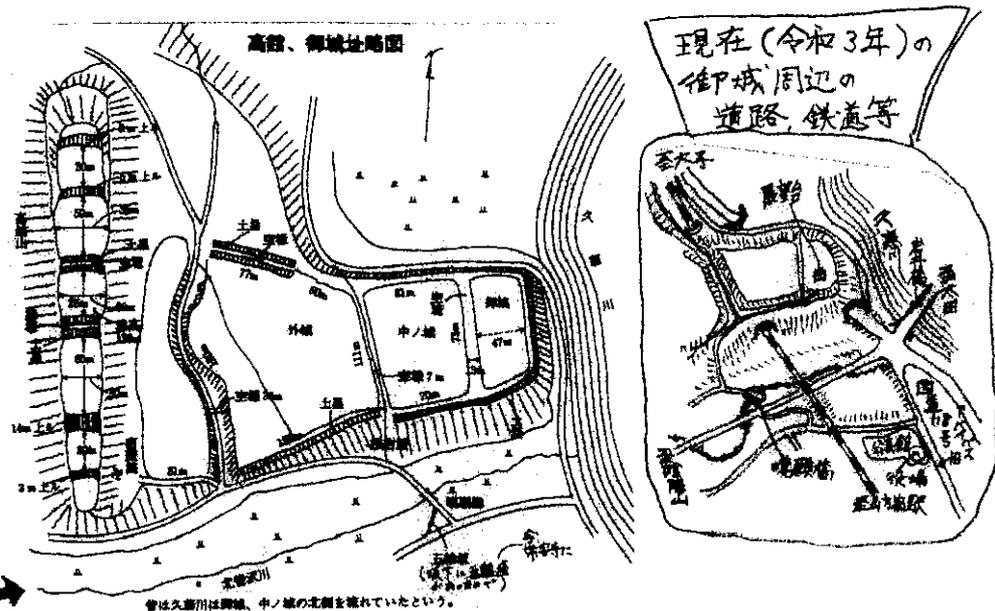
## 5 他に 南郷街道 国道118号 山方の宿 山方バイパス 水郡線 陰陽神社

嘆願橋を過ぎ、御城への登り道の傍らに南郷街道の小さな案内板がある。南郷街道は、山方町の役場・中央公民館のところで西に折れ、嘆願橋を渡り中城と外城の間を抜け北の崖を下り北上している。大子方面への主要な通りだった。その後、御城の東、北の崖の中腹を巡るような新しい道が整備されると、嘆願橋経由のルートはさびれた。新しい道の名残として、新上町・新道の集落名が残る。山方宿駅、役場、御城東と北進するこの道路、当時の国道118号沿いが、旧山方村・山方町の中心街であった。昭和終期に、山方バイパス・トンネルができると、かつての賑わいは今は昔となった。

水郡線が城址の下をくぐってまもなく100年になる。

光園公ゆかりの陰陽山・陰陽神社には、目を改めてぜひ訪れて欲しい。

山方町誌(上巻) 51.10



## 鹿島清秀五輪塔

大平山白馬院常安寺(曹洞宗)の北側の道路から嘆願橋に下る坂道を五輪坂といい、その角にかつて五輪塔があったが水郡線建設により大正11~12年

(1922~23)に現在地の常安寺入り口に移された。高さ2メートルもある巨大なもので、常陸大宮市の有形文化財となっている。これは鹿島清房の墓となっているが、正しくは鹿島清秀である。

天正19年2月頃に常陸佐竹氏が鹿島、行方2郡の領主たちを太田城に招いて佐竹氏の兵によって殺害した南方三十三館謀殺事件である。

鹿島清秀は大正17年(1589)に鹿島神宮大惣行事職となり鹿島城主であったが、この事件後鹿島城も攻撃されて落城している。その後、近世に入り鹿島家は再興されておりこの地で殺害された供養のため五輪塔が建てられました。

## 大串無事衛門の墓碑

17世紀中頃山方町に生まれ育ち幼少のころから父母をうやまいまた学問にもはげみました。年老いた母が快適に暮らせるように季節によって寝床を変え歩行の際には必ず付き添い神社仏閣や親戚へ行きたいと言う時には夫婦で仕事を休んで母の意に沿うように心を砕いたといひます。

江戸時代は下位の者が上位の者を敬い上位の者は下位の者を慈しむ儒教の教えが広められていました。模範的な農民像として称賛され他の農民にも理想として示されました。



鹿島清秀五輪塔



大串無事衛門墓

## 令和5年度根本正ゆかりの地を訪ねる旅収支報告書

令和5年9月24日実施

### 収入の部

| 項 目 | 金 額(円) | 備 考       |
|-----|--------|-----------|
| 会費  | 64,000 | @4000×16名 |

### 支出の部

| 項 目   | 金 額(円)  | 備 考                                          |
|-------|---------|----------------------------------------------|
| バス代   | 75,900  | トキワ交通(消費税込み)                                 |
| 傷害保険料 | 3,200   | @200×16名                                     |
| 昼食代   | 27,500  | 奥久慈ゆばの里<br>@1500×1.1×16名<br>(運転手1000×1.1×1名) |
| 飲み物   | 2,138   | お茶ペットボトル1箱                                   |
| 振込料   | 880     | ゆうちょ銀行                                       |
| 支出合計  | 109,618 |                                              |

|     |          |       |
|-----|----------|-------|
| 差 引 | △ 45,618 | 顕彰会負担 |
|-----|----------|-------|

予算 80,000円

# 漫画「根本正物語」

## 那珂市の小中校に

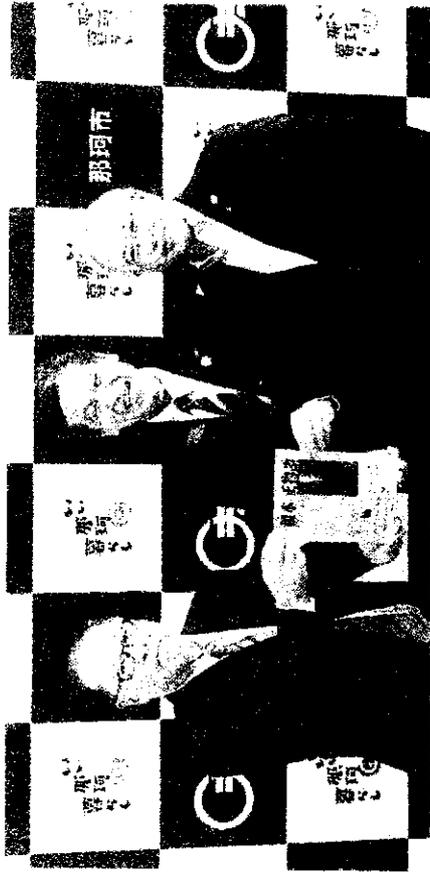
### 顕彰会が寄贈

那珂市東木倉出身で明治・大正期に衆院議員を務め、小学校の授業料無償化などに尽力した根本正（1851〜1933年）の業績を子供たちに紹介しようと、根本正顕彰会（山田正巳会長）は漫画「根本正物語」を市内の小中学校や図書館などに寄贈した。

同会は漫画冊子を2001年に生誕150周年を記念して発行。今回、教育現場からの要望で再版し、市内の小中学校や市役所、図書館、交流センターなどの市生涯学習施設に計ら15冊を寄贈した。

漫画は市内イラストレーターのまどつよつとさんが絵とシナリオを担当。市学校教育基本方針の基本理念にも取り入れられている根本正の「生き方」や「忍耐強さ」などが功績と共に描かれている。巻末では根本

漫画「根本正物語」を先崎光市長（中央）と大縄久雄教育長（左）に寄贈する山田正巳会長＝那珂市役所



正の生涯年表や顕彰碑なども紹介されている。

寄贈式で先崎光市長は「若い人たちを中心に深く知ってもらったことのきっかけとして有効活用させていただきたい」と謝辞を述べた。

山田会長は「（根本正の）我慢強さの根底にあるのは継続、持続力。頑張れば大きな花が咲くということを見童生徒にこの本を通じて学んでもほしい」と話した。

令和5年10月13日付

「茨城新聞」

**スポーツ**  
029(276)  
2181

## 100年の時を超えてと題し、お里帰り品の展示

副会長 根本正治

那珂市中央公民館の2階談話ホールにて、「100年の時を超えてお里帰り展示」と題して、根本正ゆかりの品を展示しました。

1. 展示場所 那珂市中央公民館2階談話ホール
2. 展示期間 令和5年10月1日（日曜日）～令和5年11月30日（木曜日）
3. 展示物 根本正がアメリカバーモント州でお世話になったビリングズ家へ記念の品として日本から贈った品々。

### ■里帰りになった経緯

2021年の9月にビリングズ家の豪邸が売りに出されているという話を聞いた。この豪邸は、根本正顕彰会の「ゆかりの地を訪ねる旅」で1999年4月に訪問し歓迎を受けた場所でもある。

豪邸には根本正が約100年前にお礼に送った絵画が展示されていた。豪邸が人手に渡る前に、日本でよく言う”お里帰り”と題して、記念の品を日本へ戻してもらえないかと、現在の当主フランクリン・ビリングズ3世へ連絡し、2022年11月に”お里帰り”が実現した。

根本正は、安藤広重の浮世絵等有名な絵画も贈っていたが、これに関しては既に行先が決まっていた。2021年9月に豪邸にかかっていた高瀬五畝の作品や根本正直筆の説明書きが”お里帰り”となった。

### ■根本正がお世話になった現在の Marsh - Billings - Rockefeller National Historical Park (下記の写真は売りに出された建物ではありません。)



■ビリングズ家の壁に掛けてあった、根本正が贈った「高瀬五畝」作の色紙4枚（2021年9月撮影）



■那珂市中央公民館2階談話ホール展示の様子



■まとめ

那珂市中央公民館のご厚意により、2カ月間という長い期間の展示となりました。多くの方にご覧いただけた事と考えます。今後も顕彰フェスティバルやその他の機会に展示したいと思います。

以上

## 令和5年度根本正顕彰フェスティバルが開催されました！！

期 日 令和5年10月2日(月)

会 場 戸多地区交流センター(旧戸多小学校)

趣 旨 根本正顕彰会の重要な広報活動の一つである顕彰フェスティバルは、これまで那珂市内外で開催してきましたが、市内で唯一未開催地区であったのが「戸多地区」でした。今年は、戸多地区まちづくり委員会のご好意により、共催(地区の「歴史講座」と同時開催)で開催することができました。

内 容 開会のことば (戸多地区まちづくり委員会 小貫生涯学習部長)

主催者あいさつ

根本正顕彰会 山田正巳会長

平成9年に発足した顕彰会が、今日まで続いていることを誇りとしている。根本正の生き方が那珂市の教育の根幹に据えられ、子どもたちの生きる力、生き抜く力となっていてほしい。今回、戸多地区の皆様のご協力によりフェスティバルが開催できたことに感謝とお礼を申し上げます。

戸多地区まちづくり委員会 根本泰之委員長

国会議員して大きな足跡を残している根本正代議士、常に信念をもって邁進し、生きている間の時間を大切にされた方だと思う。那珂台地に生きた素晴らしい人物を学ぶ良い機会であると期待している。



山田正巳会長のあいさつ

講演

- ① 郷土が生んだ不屈の政治家 根本正の生涯 (山田正巳会長)



- ② 水戸藩甲辰の国難と戸多地区の先人たち (仲田昭一理事)



閉会のことば 根本正顕彰会 小堀 優理事

※ 講演は毎回、根本正の生涯と地元の歴史等を組み合わせています。多くの参加者を得ての開催、改めて郷土の偉人の存在を認識され、さらに那珂市に誇りを感じられたとの声が聞かれました。詳細は、別添の資料を参考にしてください。

# 根本正の生涯

講師 根本 正顕彰会  
会長 山田正巳

1. 生い立ち
2. 水戸に出る
3. 東京に出発
4. 米国留学
5. 政治家を志す
6. 海外移民地調査・商工視察
7. 国政での活躍
8. 政界引退

別表 = 根本正の年表

## 1. 生い立ち

根本 正は嘉永4年（1851）東木倉村（現 那珂市東木倉）で父徳孝・母はやの間に次男として生まれた。根本家は農業を営み庄屋を務める家柄であった。そして、水戸徳川家のために骨身惜しまず忠勤を尽くしていた。

正の祖父は学問的要素のあった人で、正が6～7歳の頃の少年時代に祖父より「読み・書き」を習った。正が9歳のときから神主の佐川伊豫之介の塾に通って学んだ。



## 2. 水戸に出る

正が13歳のとき、もっと上を目ざして学びたいということで水戸に出て行くこととなった。正の父徳孝の従兄弟で「大日本史」編纂をする水戸彰考館の総裁であった豊田天功の家僕となった。豊田天功は当時水戸上市の新屋敷といわれる地（現在の水戸市立新荘小学校辺り）に屋敷を構えていた。天功に仕え、天功亡きあと長子の豊田小太郎に仕え学問、武芸等を学んだ。豊田小太郎が暗殺され、亡きあと水戸藩南御郡方役人となる。

その翌年正が17歳のとき、水戸藩御郡方奉行服部潤次郎からフランスのパリ万博土産の「時計とマッチ」を見せられ大変驚愕し、それらを生み出した背景にある外国語（英語）を学ぼうと決意する。

## 3. 東京へ出発

正が20歳のとき水戸藩の役人を辞めて上京する。人力車夫をし、その後警視庁の巡査になり働きながら蘭学者箕作秋坪の「三又学舎」、翻訳者中村正直の「同人社」に学んだ。この中村正直との出会いがキリスト教入信へのきっかけとなった。その後駅通齋（外国郵便）に就職し、神戸、横浜局に勤務した。

横浜で働きながら「ヘボン塾」に入門し英語を習った。そして横浜の住吉教会で洗礼を受ける。こうして学びながら渡米の機会を探っていた。

#### 4. 米国留学

正が28歳のとき横浜郵便局に勤めるアメリカ人の紹介で渡米することとなった。アメリカのオークランドの小学校に入学し、弁護士のパラスト一家で働きながら2年間で小学校を卒業する。続いてポプキンス中学校に入学し寄宿舎の給仕などをしながら4年間学んだ。中学校卒業後パラスト氏の紹介でバーモンド州の富豪ビリングス氏にお世話になり、バーモンド大学で4年間学んだ。卒業式には代表10名の1人に選ばれ英語で演説している。10年間のアメリカ留学で多くのことを学んだ。

留学を終えてアメリカからの帰路見聞を広めるため、ビリングス氏の支援を受けてイギリス、ドイツ、フランス、イタリアの4カ国を視察して日本に帰国する。

#### 5. 政治家を目指す

米国留学から帰国後帰郷しているとき、板垣退助伯爵から電報で愛国公党（後の政友会）への誘いを受けた。そして入党し政務調査員となり調査研究、各地への遊説、翻訳書の出版などをしながら政治家を目指すこととなる。

明治23年（1890）第1回総選挙、続いて明治27年（1894）の第3回総選挙に立候補するもいずれも落選する。

#### 6. 海外移民地調査、商工視察

長い海外留学の経験を高く評価されて外務省、農商務省の命令により、海外移民地の探検調査、商工視察として明治26年～明治32年までの間、メキシコ、中央アメリカ、南米ブラジル、北米、東南アジアに合計4回視察出張する。そのたびに膨大な調査報告書を提出している。

#### 7. 国政での活躍

明治31年（1898）の第5回総選挙に立候補し初当選を果たす。以後大正13年（1924）まで26年間衆議院議員を務める。

根本 正は特に教育立国を目指し教育の充実、青少年の健全育成を重点として不屈の精神で政治活動に取り組んだ。

衆議院議員としての主な業績

- (1) 国民教育授業料全廃建議案提出 (可決)
- (2) 小学校教育費国庫補助法案提出 (可決)

- (3) 未成年者喫煙禁止法案提出 (可決)
- (4) 未成年者飲酒禁止法案提出 (21年間心血を注いで成立)
- (5) 利根川水害被害状況調査治水対策に尽力
- (6) 高層気象観測所設置の建議 (つくば市に設置)
- (7) 水郡線建設の建議案提出
  - (昭和2年水戸—大子間開通)
  - (昭和9年水戸—郡山間全線開通)
- (8) 東海村砂防林植栽に貢献

## 8. 政界引退

大正13年(1924)衆議院議員選挙落選政界を引退する

昭和8年(1933)東京三田の自宅にて死去

平成26年(2014)那珂市名誉市民に選定され称号が贈られる



先祖地の碑



根本正が好んだ古歌  
(根本喜代治氏所蔵)

# 根本正の年表

| 年 号 ( ) は西暦             | 年 齢       | 経 歴                                                                                                                             |
|-------------------------|-----------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 嘉永 4年 (1851)            |           | 東木倉村 (現 那珂市東木倉) に生まれる。                                                                                                          |
| 万延 元年 (1860)            | 9         | 神職の佐川伊豫之介の塾に学ぶ。                                                                                                                 |
| 文久 3年 (1863)            | 12        | 豊田天功の家僕となり、水戸学に触れる。                                                                                                             |
| 元治 元年 (1864)            | 13        | 豊田天功死去。子息小太郎に仕える。                                                                                                               |
| 慶応 3年 (1867)            | 16        | 水戸藩南御郡方役人となる。                                                                                                                   |
| 明治 元年 (1868)            | 17        | 水戸藩東御郡方奉行服部潤次郎から、パリ万博土産の時計とマッチを見せられカルチャーショックを受ける。                                                                               |
| 明治 4年 (1871)            | 20        | 役人を辞めて上京。<br>蘭学者箕作秋坪の「三又学舎」に入門。<br>翻訳者中村正直の「同人社」に学ぶ。                                                                            |
| 明治 5年 (1872)            | 21        | 警視庁巡査になる。                                                                                                                       |
| 明治 7年 (1874)            | 23        | 駅通寮 (外国郵便) に就職し神戸に勤務。                                                                                                           |
| 明治10年 (1877)            | 26        | 横浜局に転勤。「ヘボン塾」に入門。                                                                                                               |
| 明治11年 (1878)            | 27        | 横浜の住吉町教会 (現在指路教会) で先礼を受ける。                                                                                                      |
| 明治12年 (1879)            | 28        | シテイ・オブ・ペキン号で渡米。<br>オークランド小学校に入学。                                                                                                |
| 明治14年 (1881)            | 30        | ホプキンス中学校に入学。                                                                                                                    |
| 明治18年 (1885)            | 34        | バーモンド大学に入学。                                                                                                                     |
| 明治22年 (1889)            | 38        | バーモンド大学卒業。<br>イギリス、ドイツ、フランス、イタリア4国を訪問。                                                                                          |
| 明治23年 (1890)            | 39        | 板垣退助伯爵から電報で勧誘を受け愛国公党 (後の政友会) に入党し政務調査員となる。<br>第1回帝国議会衆議院議員選挙に立候補するも落選。<br>羽部徳子 (幕末の勤皇家 桜任蔵の孫) と結婚。<br>東京禁酒会設立 会長 安藤太郎 副会長 根本 正。 |
| 明治26~32年<br>(1893~1899) | 42~<br>48 | 外務省・農商務省命令により、海外移民地探検・商工視察としてメキシコ・中央アメリカ・南米ブラジル・北米・東南アジアに計4回出張。                                                                 |
| 明治27年 (1894)            | 43        | 帝国議会衆議院議員選挙に立候補するも落選。                                                                                                           |
| 明治31年 (1898)            | 47        | 帝国議会衆議院議員選挙に立候補し、初当選。<br>国民教育授業料全廃建議案・小学校教育費国庫補助法案提出、可決。                                                                        |

| 年号( )は西暦    | 年齢 | 経歴                                                                                             |
|-------------|----|------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 明治32年(1899) | 48 | 未成年者喫煙禁止法案提出、可決。                                                                               |
| 明治33年(1900) | 49 | 未成年者喫煙禁止法施行(4月)。                                                                               |
| 明治34年(1901) | 50 | 未成年者飲酒禁止法提出。                                                                                   |
| 明治39年(1906) | 55 | 利根川水害被害状況調査。                                                                                   |
| 明治43年(1910) | 59 | 高層気象観測所設置の建議。(大正9年つくば市に設置)                                                                     |
| 明治44年(1911) | 60 | 水郡鉄道(当初は白水線)建設の建議案提出。<br>(昭和2年(1927年)常陸大子まで開通)<br>(昭和9年(1934年)水戸～郡山間全線開通)。                     |
| 大正7年(1918)  | 67 | 東海村砂防林植栽に貢献。                                                                                   |
| 大正11年(1922) | 71 | 未成年者飲酒禁止法成立。<br>(21年間心血注いだ法案成立・正の心境は次の歌に表れている)<br>「踏まれても 根強く忍べ 路芝の やがて花咲く 春をこそ待て」<br>政友会を脱会する。 |
| 大正13年(1924) | 73 | 33票差で衆議院議員選挙落選。政界を引退する。                                                                        |
| 昭和5年(1930)  | 79 | 大子町に銅像建立される。                                                                                   |
| 昭和8年(1933)  | 82 | 東京・三田の自宅にて死去。<br>(東京青山墓地に眠る。後に那珂市東木倉に分骨さる)                                                     |
| 昭和9年(1934)  |    | 水郡線全線開通。                                                                                       |
| 昭和18年(1943) |    | 妻徳子死去(77歳)。                                                                                    |
| 昭和26年(1951) |    | 根本正生誕100周年式典開催(主催・五台村)。                                                                        |
| 昭和41年(1966) |    | 日本基督教婦人矯風会より「光をかかげた人—根本正伝」出版さる。                                                                |
| 昭和44年(1969) |    | 大子駅前に銅像建立さる。                                                                                   |
| 昭和46年(1971) |    | 「郷土史にかがやく人々」に取り上げられる。<br>(茨城県の先覚者41名の伝記)                                                       |
| 平成7年(1995)  |    | 「根本正伝(未成年者飲酒禁止法を作った人)出版さる。<br>(著者は仙台市在住加藤純二氏)                                                  |
| 平成9年(1997)  |    | 根本正顕彰会発足。                                                                                      |
| 平成10年(1998) |    | 那珂市東木倉根本家敷地内に「生誕地の碑」建立。                                                                        |
| 平成13年(2001) |    | 「根本正顕彰碑」建立(那珂市中央公民館前)。<br>根本正生誕150周年記念式典開催(主催・根本正顕彰会)<br>(記念誌発行、ビデオ作成、シンポジウム開催等)               |
| 平成20年(2008) |    | 「根本正伝」出版(発行 根本正顕彰会)                                                                            |
| 平成26年(2014) |    | 那珂市名誉市民に選定され称号が贈られる                                                                            |

## 水戸藩甲辰の国難と戸多地区の先人たち

### 1 水戸藩と幕府との関係

#### <家康の遠望>

佐竹義宣を秋田へ移封 重臣榊原泰政、5男信吉、10男頼宣、11男頼房を封ずる  
「水戸」の位置づけ 御三家の一つ 定府制 東北への抑え

江戸城内「溜間詰大名の選定」

(神君家康公以来の家臣、幕政を担う責任感、配置に注意)

|            |     |      |            |     |      |
|------------|-----|------|------------|-----|------|
| <u>彦根藩</u> | 井伊家 | 35万石 | <u>桑名藩</u> | 松平家 | 11万石 |
| <u>会津藩</u> | 松平家 | 23万石 | 姫路藩        | 酒井家 | 15万石 |
| <u>高松藩</u> | 松平家 | 12万石 | 松山藩        | 松平家 | 15万石 |
| 小浜藩        | 酒井家 | 10万石 | 岡崎藩        | 本多家 | 5万石  |
| 忍藩         | 松平家 | 10万石 | <u>庄内藩</u> | 酒井家 | 14万石 |

#### <水戸藩主の遺訓>

「尊王攘夷」表明について、

義公光圀は裏面的に穏やかに慎重に、烈公斉昭は表面的に具体的・刺激的に  
歴代藩主に継承された意義 最後の将軍徳川慶喜(烈公の七男)の大政奉還

### 2 幕府、烈公斉昭を処罰：隠居謹慎

天保14年(1843)5月18日 第12代将軍家慶より藩政の美を以て褒賞される  
「徳川光圀の遺志を継述して益々誠忠を励め」

弘化元年(1844)5月6日 将軍家慶、隠居謹慎の命伝達

鉄砲連発の事、松前・蝦夷地拜領願いの事、経済不如意の事、  
諸浪人召し抱えの事、東照宮祭祀改めの事、寺院破却の事、  
弘道館土手の事

※ 家老戸田忠徹・側用人藤田東湖は蟄居謹慎の処分

斉昭、江戸駒込中屋敷で謹慎 藩主は長子慶篤就任

### 3 水戸藩の対応及び領民の対応

5月10日 領内、鳴り物摂政の禁止令

士民の雪冤運動

菅谷村横須賀勤兵衛 大岩村竹内源介 上小瀬村井樋政之丞 小場村安藤幾平  
成沢村加倉井砂山 田谷村田尻新介 (いずれも大庄屋：山横目)

戸村：檜山伴七（小場村安藤幾平と縁戚関係、会沢正志斎に学ぶ。（「檜山伴七日記」など参照）

- 7月16日 水戸城下出発 — 27日 小石川屋敷内黒鍬頭檜山語平次と情報交換  
7月28日 同宿の甲州御嶽山神官小田切伊豆も雪冤に出府（他藩にまでの影響に驚く）  
8月3日 小田切と小石川屋敷御納戸役近藤儒兵衛に嘆願書提出するも翌日差し戻し  
10日 仙台藩屋敷へ歎願 8月下旬帰郷

8月3日 神職連盟、藩に雪冤を歎願

額田村白石陸奥 堤村多賀野但馬 鴻巣村鷲尾金吾 本米崎村海後山城  
福田村今瀬伊織 田崎村小田部兵馬  
※ 修験ら20院も宥免の祈禱

8月12日 西郡郡奉行金子孫二郎から領民への「静謐（せいひつ）」の厳命

#### 4 義民の歎願行動（無願出府は違反）

8月17日 処罰から「百日目」 宥免への期待 「空し」 ⇒ 義民の歎願行動激化

9月

紀州藩邸へ 田崎村庄屋鹿島縫殿衛門 阿久津藤左衛門 貞介（次平の子）  
松平公（藩不明）へ 田崎村次平 儀介 藤兵衛  
山野辺兵庫頭（水戸藩家老）へ 戸村檜山伴七 五衛門 儀介 藤兵衛 藤左衛門  
下江戸村平次  
松平将監申之介（長倉城主） 下江戸村藤蔵 本介 田崎村次兵衛 儀介

9月から10月

松平主税頭へ 下江戸村平次 本米崎村福地理衛門  
中山備後守（附家老）へ 戸村五衛門 下江戸村栄介  
尾張藩邸へ 田崎村鹿島縫殿衛門ら11名

8月13日、10月9日 斉昭の諭書

「歎願行動は分かるが、今は穏便にして藩主慶篤を翼戴し、職務に精励するように」

9月25日 領内の農民や町人ら上町八幡神社、吉田神社、静神社、鹿島神宮へ祈禱

10月16日 千束原（水戸市郊外）に4千人、東木倉村清水原に5千人、代表500人が江戸へ出府するも引き返される

10月12日 戸村檜山伴七、再度の出府 会津藩へ

20日 家老武田耕雲斎、南組郡奉行吉成又右衛門らも老中水野忠邦や牧野忠雅へ歎願

11月26日 斉昭の処分・謹慎解除、藩政関与は不可 ⇒ 藩政関与の歎願へ

#### 5 斉昭復権（藩政関与）への歎願

12月6日～11日

江戸の水戸藩邸近辺での放火等の騒ぎに対して斉昭警護への出府願

菅谷村小宅三左衛門、東木倉村後藤信之允、成沢村加倉井砂山ほか近隣の郷土、山横目ら21名

弘化2年(1845)

- 3月8日 戸村檜山伴七 相模戸塚の松原にて紀伊藩主へ駕籠訴  
田崎村阿久津藤左衛門 大岡邸へ
- 9日 田崎村阿久津藤左衛門 阿部正弘老中へ
- 18日 額田村神官白石西丸 静神社神官齋藤監物ら神官連盟34名ら訴願(訴願先不明)
- 21日 本米崎村福地理衛門(訴願先不明)
- ほかに3月に戸村市郎衛門・前浜村吉内連盟(訴願先不明)

## 6 過酷な処罰

江戸駒込屋敷牢 6畳部屋に36人  
田崎村阿久津藤左衛門罹病(弘化2年:1845)  
辞世 浮舟のとも綱とひて真帆かけて 嵐の浪に身は沈むとも  
野棄て同様の処置 遺体破碎 老母・妻子、藩邸家老らへの抗議  
戸村檜山伴七  
水戸赤沼牢にて死亡

## 7 斉昭の復権

嘉永2年(1849)3月13日 斉昭の復権、水戸藩政関与を認められる  
下江戸村藤蔵や小貫源兵衛ら小場村横山目安藤幾平宅へ知らせに行き、祝杯を挙げる  
安政元年(1854)遺家族へ弔慰金下付  
9月15日 阿久津藤左衛門への令達  
弘化2年(1845)、3月29日病死 小石川常泉院仮埋葬  
内々改葬勝手次第、葬式等懇ろに営むべし ⇒ 村葬

檜山伴七

改葬許可 安政元年冬 ⇒ 村葬 位牌は会沢正志齋書

- ※ 烈公の藩政改革のうち、社寺改革の行き過ぎ
- ※ 神武天皇御陵の修復提言
- ※ 蝦夷地拝領の依願  
など、幕府の方針に抵触することから、幕府の水戸嫌疑増大
- ※ 水戸藩領民の烈公への信頼、報恩の篤い情熱
- ※ 根本正も「弘道館記」軸装を書齋に掛け、一文を揮毫

## 令和5年度 根本正顕彰会公開講座（報告）

日 時 令和5年11月23日（木）  
会 場 那珂市中央公民館 講座室  
講 師 顧問 海野 徹氏（元那珂市長）  
題 目 「顕彰会立ち上げ時の思い出」

参加者 27名

山田正巳会長の挨拶の後、司会者から秋の叙勲において、海野 徹氏が「旭日小綬章」を授与された件が発表されました。おめでとうございます。

続いて、顕彰会が立ち上がってから25年になりますが、海野氏は当時の記憶を掘り起しながら、講演が始まりました。

設立当時のことは大変懐かしそうで、事務局長として、東奔西走し「長久保赤水顕彰会」などをお手本として、会則、会費、運営の方法などを策定したとのことでした。

その後、別添のレジュメに沿って、外交史料館など精力的に駆け回ったことなど設立にまつわる事項を順次、当時を回想しながら講演されました。

なお、海野氏の根本正への思いは人一倍強く、市長としての在任中には、根本正を含めた4人の名誉市民を制定しております。

講演の後に質疑応答に入り数件の質問がありましたが、皆さん、熱っぽく質問されていることを感じ取りました。

その中で、那珂市名誉市民を市役所のロビーに掲示されてはという意見がありました。

この件につきましては、海野氏も講演のなかで申されており、現市長の先崎 光氏も挨拶のなかで触れておりました。

顕彰会としても、今後の課題として進められたらと思います



海野 徹氏



会場風景

## 根本正先生との出会いと顕彰会設立の思い出

海野 徹

私が根本正先生のお名前やその功績について知ったのは、恥ずかしながら平成8年、当時47歳の時です。

母が昵懇にさせていただいていた根本静江先生（根本先生の分家筋で那珂市ふるさと大使の根本直さんのご母堂、故人）から頂いた『根本正伝』という著書を拝読したのがきっかけでした。

著者は御承知のように仙台の内科医院院長の加藤純二先生（那珂市ふるさと大使）で、アルコール依存症関係の禁止運動に関する論文を作成中、根本正という人物に遭遇しその人間性やひたむきに努力を重ねる姿勢と国民の福利向上・青少年の健全育成に渾身に取り組む姿に感動し（未成年者飲酒禁止法を作った人『根本正伝』）を上梓するに至ったことを後日お聞きしました。

当時私は、那珂町役場が主導する地域活性化や地域興しを目的とする『なかなか塾』に参加しており、事業の一環として根本先生について調査を行こうと後藤啓文さんを責任者として、高畑精一さん（なかなか塾塾長）と私が仲間に入りました。

顕彰会を立ち上げるにはどのように手続きを進めればよいか、仲田昭一先生（後に茨城県立日立第二高校校長、那珂市歴史民俗資料館館長）のご自宅を三人で訪問し懇切丁寧なご指導をいただきました。

又、先進事例を参考にしようと高萩市の『長久保赤水顕彰会』を訪ね、当時の大崎宥一会長や生涯学習課長の佐川春久さん（後に総務部長、現在顕彰会会長）の職場や大能のご自宅をお尋ねし沢山のことをご教示いただきました。

高萩市には根本先生の幼少時代の神社の塾の先生であった佐川伊予之介の顕彰碑（佐川愛廣先生の碑の撰文が根本先生）が高萩高校へ至る中段にある事や、佐川伊予之介が佐川春久さんの分家筋に当たる事、又、墓地が同じであることなど偶然の発見に驚いた記憶があります。

その後複数回にわたり高萩に足を運び、会則や会費、運営の方法について教えを賜りました。現在の根本正顕彰会の会則、会費は長久保赤水顕彰会を参考にほぼ同じに策定したものです。顕彰会の設立総会が平成9年に開催され初代会長には柏村一郎さん（故人）が就任されました。

柏村さんの根本先生に対しての思い入れは大変強く、用意されていた論文は格調高くかつ長文のものでした。

柏村会長をはじめ役員・会員ともに熱心に活動を展開していく事になりました。国立国会図書館や、外交史料館、国立公文書館など、あるいは根本先生のお孫さんである根本正廣さんのご自宅を資料収集のために私の車で案内したことを懐かしく思い出します。

海後宗文さん（桜田門外の変、烈士海後磋磯之介の本家筋で三島神社宮司、故人）は何とか顕彰事業を盛り上げようと、根本先生の生家（根本正治さん宅）に『根本正先生生誕の地』を海後さんの自費で建立しました。

海野さん花火を打ち上げようや、と言う言葉は今も忘れません。

## 顕彰会立ち上げ時の思い出

- 一村一文化創造事業
- 茨城県から100万円3年間継続事業
- 那珂町から100万円3年間継続事業
- メンバーの公募（16名の参加）
- 若者、馬鹿者、変り者
- なかなか塾創設
- 初代塾長は高畑精一さん
- 那珂八景
- 一番地物語
- ため池物語
- 根本正顕彰事業
- 加藤純二先生執筆『未成年者飲酒禁止法を作った人 根本正伝』
- 仲田昭一先生のご指導を頂く
- 長久保赤水顕彰会のご指導
- 佐川春久生涯学習課長（当時）現長久保赤水顕彰会長のアドバイス
- 顕彰会会長大崎侑一面伯の御指導
- 佐川安應（やすまさ）さん
- 赤水地図と総務省（竹島）
- 長久保赤水顕彰会会員は約800人
- 議員立法
- チャンピックス
- シアナマイド
- 常陽芸文・根本正男さん
- 生誕の地石碑・海後宗文さん
- 朝日新聞村野記者「教育立国の恩人」キャッチフレーズ
- NHK・中学生日記
- 記念館（常設）
- テレビドラマ（60分）
- 胸像を市役所ロビーに設置
- 青山霊園歴史的墓所ガイドに根本先生の名を記載
- 那珂市立小中学校における授業取り組み

## 忘己利他（もうこりた）

自分のことは忘れ、他の人に尽くせ。これこそ仏教が理想とする人間の生き方である。

最澄「己を忘れて、他を利するは慈悲の極みなり」

私たちの心には利己があります。「己が一番・己を優先する・・・。」これは生物学的に当たり前のことです。そうでなければ弱肉強食のこの世の中で生きていけません。しかし、利他の心も持ち合わせています。「他人のために・誰かのために・・・。」日本人は、世界の人類の中で最も利他の心の多い人間といわれています。日本人としてうれしいです。そうは言っても、「自分のことを忘れ、他に尽くす。」それはなかなか無理なことです。まず、自分の身の周り幸せを願ひ、そのために努力し、そして、余裕があれば他の人の幸せのために尽力する・・・それが大事だと思います。自分を犠牲にして他に尽くす、それは本末転倒で、決して長続きしません。

私たちの活動も無理はせず、持続可能なものにしていかなければなりません。そうでなければ「忘己利他」が「もう懲（こ）りた」になってしまいます。

令和5年5月14日(日)、中央公民館で「令和5年度 根本 正顕彰会総会」がありました。根本 正の功績については、第1地区前民生委員・児童委員の細貝さんから度々紹介があり、ご存知の方が多いと思いますが、再度紹介させていただきます。根本 正は、今から170年ほど前に五台村東木倉に生まれました。20歳の時、東京へ出て昼間は学校で学び、夜は人力車を引いて働きました。苦勞してアメリカに渡り、27歳でアメリカの小学校に入り、中学校・大学も卒業しました。日本に帰ってからは46歳で衆議院議員になり、人々の生活がよくなるよう国会にたくさんの提案をしました。例を挙げると、義務教育の授業料無償化、未成年の喫煙や飲酒の禁止、そして、水郡線の敷設です。それまで県北地区の農産物等を東京方面に運ぶには、3日も4日もかかっていました。そこで正は、水戸市から郡山市を結ぶ約150kmの水郡線を造ることを考えたのです。水郡線の開通により大子から東京に約5時間で行けるようになり、たくさんの人が喜びました。(小学校社会科副読本「なか」の『郷土の発展に尽くした人々』より)

市長・教育長さんから、根本 正に関する貴重なお話をお聞きしました。今年度小学校高学年生は、ふるさと教室で、開業90周年を迎える「水郡線に乗って、常陸大子駅まで行こう」という学習があるようです。(常陸大子駅には根本 正の銅像があります。)

正は、『ふまれても 根強く忍べ 路芝の やがて花咲く 春をこそまで』という歌を詠み、青少年の健全育成にも尽力しました。正は、名誉市民(正を含め、4人の政治家)にも選ばれています。身近にこのような偉人がいたことを改めて誇りに思います。

根本 正のような生き方はなかなかできませんが、私たちは、民生委員・児童委員、主任児童委員として、地域の高齢者・困りごとを抱える人、児童生徒のために役に立っていることは確かです。胸を張って、自分の活動を進めていきましょう。暑さ厳しい折、今月も決して無理をせず、どうぞ宜しくお願いいたします。

以上は、民生委員・児童委員広報委員会が発行している『民児協だより』の8月号に載せていただいたものです。私は、連合民児協の会長をしているほか、社会教育委員・保護司等をしています。『青少年育成那珂市民会議』主催(私は家庭部会の部会長を務めています)の、青少年の主張大会・家庭教育学級講演会等の行事のパンフレットには『根本 正の生き方』として、毎回、根本 正先生の写真と歌が紹介されています。今後も先生の功績を忘れることなく、たくさんの人に伝えていきたいと思っています。

## 憧れるのをやめられない

### ～感動をその後の人生に生かした先輩と同輩

小堀 優

本文を、なぜ根本正顕彰会会報に投稿するのか。一見、根本正とは何の関係もなさそうなのに。読むうちに、あるいは読んだ後に、解っていただければありがたいです。最後に、私にとっての解答を示します。とは言っても、独断的な、我が田に水を引く考えと一笑に付されるかもしれませんし、もっと的確な解があるかもしれません。答は一つとは限らないものです。

8月以降、新聞投稿から遠ざかっていた。やらねばならないことが次々に出てきたことは言い訳か。最大の懸案は残ったままだが、今回ばかりは、筆を執らずにはいられなかった。

大学時代から「男心に男が惚れる」と尊敬してやまない小野瀬武康先輩の記事に出会ったからだ。11月15日の茨城新聞社会面「三島の言葉胸に生きる」だ。心身が震えた。改めて、小野瀬先輩のすごさが、私の全身を駆け巡った。今書かねばいつ書く。これを書かねば何を書く。一気に筆を走らせた。その後、400字にしぼるのに苦勞し、送稿は、16日夜になっていた。

うれしいことに、21日の「県民の声」に掲載された。

先輩が続ける「真剣な生き方」  (次々ページ参照)

▲15日付本紙「三島の言葉胸に生きる」に心身が震えた。茨城大に三島由紀夫が訪れたのは55年前の11月16日。「大学を正常化したい。学生を一喝してほしい」と三島に訴えた当時の学友会長が小野瀬武康さん。小野瀬さんは、三島の「明日死んでも十分な生き方をしなきゃならん」を胸に、「社会や次世代のためになる真剣な生き方」を自らに課して、55年間実践を重ねてきた。

▲県庁の仕事に全力投球する傍ら、力を入れてきた国際貢献活動や剣道修行は今も続く。記事以外にも「里山のたまり場」活動、東京の市場で「小野瀬ブランド」として待たれる農作物栽培など超人的な活躍だ。

▲私が中学校勤務時に開かれた立志式では、小野瀬さんが実践に裏付けられた講話で生徒の心に明かりをともしてくれた。2年後輩の私は、大学当時から憧れ、小野瀬さんの背中を仰いできた。今も会う機会があり、そのたびに襟を正される。次に爪のあかを頂くまでは、記事を反すうして已を律したい。(那珂市 無職 小堀優 74歳) 2023・11・21

以下に、関連して想起したことを記す。

三島を招いた茨苑祭実行委員会の末席に、大学2年の私もいた。習い始めのレタリングで、講堂入り口正面に掲げる三島の看板も書いた。ネオカラーの色と匂いも懐かしい。

大学正門から会場に続く人波と会場内の熱気は、55年経った今も鮮明に残る。残念ながら、私は、小野瀬先輩のように自分の生き方に活かせなかった。因みに、先輩の車のナンバーは、「11・25」。もちろん、三島のあの日、11月25日に因む。

その日、市ヶ谷でのニュースを聞いたのは、三島来水の2年後の茨苑祭の一つの行事、駅伝大会の開会前だった。その年の学友会長軍司清巳は、三島の生き様に何か弾けた。卒業に当たっての送別会での彼の獅子吼えの写真は、今も彼のタブレットに大切に保管されている。市ヶ谷のバルコニーでの三島の獅子吼そのものの意気を込めて。

彼は、卒業後、アルバイトで得た資金で、単身ニュージーランドに渡った。後年、起業に成功し、当地の日本人会会長も務めるなど活躍した。6年前には、海外邦人として叙勲を受けた。知

る人のいない異国の地で、下積み時代の苦勞、成功後の難問に遭遇するたび、前出の写真を凝視したかと思う。なんと、私の送った拙い墨書を50年も持っていてくれたほどだから。ニュージーランドからの手紙の返事に、西郷隆盛の命日に書いた「至誠」を入れたものだ。「国土軍司清巳」を添えて。「至誠」も「国土」も、彼に相応しいと今も思う。帰国のたびに、盃を酌み交わせるのはうれしい。小野瀬氏が、フィリピンに開いた武道場の手ぬぐいには、「至誠一貫」の文字が染め抜かれている。先輩も叙勲を受けている。

軍司とは、3年の時、共に学友会役員として汗を流した。小野瀬会長の次の代だ。その年、昭和44年は、学園紛争の最も激しかったとき。学園の正常化と課外活動の充実を目指す学友会活動は苦難の連続であった。こんな時こそ、学友会が大切さだ。しかし、進んで火中の栗を拾う者はいない。次期会長候補選出に何度も会合を重ねた。「やっぱり、会長は軍司にお願いしよう」となった。彼はその日の会議を早退していた。深夜であったが、使者として軍司宅に私が行くことになった。隣の勝田市まで寒風の中、7～8kmを自転車で急いだ。何とか辿り着き、薄明かりの窓を叩いた。彼の部屋だった。会長をしたことが後々の諸活動の原点であり、拠り所・支えとして大いに役立ったと、彼は今も言う。

小野瀬先輩も同輩の軍司も、目標を定め実行を継続し成果を上げた。そんな二人とのご縁に感謝する。憧れる人がいるのは幸せだ。今年のWBC決勝戦に臨んで、大谷翔平選手の喝「憧れるのをやめましょう」はあまりにも有名だ。でも、小野瀬、軍司の両氏を憧れることを、私はやめられない。私にとっては、二人とも、近くて遠く、遠くて近い存在だ。

今日午後3時から軍司と会う。高校の同窓会だ。明るく令和6年の干支は甲辰。昭和の甲辰、1964年は、我々の高校入学の年。それで、同窓会となった。発起人の一人である彼は、一時帰国している。  
(ここまで、令和5年12月4日午前に記す)

ここまでお読みいただき、ありがとうございます。冒頭の私の問い「本文を、なぜ根本正顕彰会会報に投稿するのか。」の答えの検討ができましたか。この後に、私の答えの代表的な一つを記します。それを読む前に、もう一度を考えてみてください。

私は、偉大な物事をなす人の共通点を意識して上記の文を綴った。偉大なる根本正先生、憧れの小野瀬武康先輩、同窓の鏡である軍司清巳さんの心底を流れるのは、「感動から何を学び、自分の生き方・人生に具体的にどう反映させるか」であると考えている。

根本正先生は、徳川昭武公に随行した水戸藩士が持ち帰った土産品を見ての感動を、米国での学びに繋げ、多くの業績を残した。同じく随行した渋沢栄一は、「近代日本経済の父」になった。まもなく、新一万円札の肖像として登場する。私の身近にいた小野瀬、軍司の両氏は、先の文で述べたように、三島由紀夫の言動を自分のものとして生かした。同じ経験をしてそれなりに心揺さぶられた私は、壮にして為すこと少なく、老いての衰えが目立つ。何ゆえか。

これが、ただ一つの正解ではないと考えます。別の答えを考えた方も、おられると思います。教えていただければありがたいです。本会報に投稿いただければうれしいです。

1月2日3時から小野瀬会長時代の茨城大学学友会役員会第56回新年会（コロナ禍で第53回のみ休会）に、参加させていただく。今回も、爪の垢を手に入れたい。1月下旬、軍司は勝田マラソン出場のために来日する。その夜、彼を囲んで仲間が集う。高2の歩く会で全校2位になった男だ。優勝を目指した高3は、途中で中止になって奈落の底に落ちた。そこから立ち直った後、大学以降の活躍は既に述べた。  
(最終稿 令和5年12月30日夜)

# 三島の言葉胸に生きる

「明日死んでも十分な生き方をしなきゃならん」。今から55年前の1968年11月16日、作家の三島由紀夫が水戸市文京の茨城大を訪れ、講堂を埋め尽くす学生を相手に討論した。同大では当時、学生運動が激化。学内団体の対立による混乱のさなか、三島は学生にどう生きるべきかを説いた。招いたのは当時、同大の学友会会長だった小野瀬武康さん(77)「那珂市」。あの出会いで人生が変わった」。三島の言葉は若者の心を揺さぶった。



三島由紀夫

## ■対立続く学内

「私の血の中には水戸の血が多少流れております」。三島は冒頭、水戸との縁に



## 55年前、茨城大で熱弁

### 那珂市「人生変わった」 小野瀬さん

三島由紀夫を招いた小野瀬武康さん「水戸市文京の茨城大講堂

触れた。父方の高祖父が宍戸藩主の松平頼位。三島は「水戸の人は皮肉屋、偏屈と言われる」と祖母から聞かされたとし、「皆さんの批判の嵐の前に立つ気になつてきたのも、やはり水戸の血のなせるわざでありま

す」と切り出した。討論では「イデオロギーと秩序はどちらが大切か」「守るべきものは何か」「未

来は存在するか」と問題提起したとされ、これら一連のやりとりは「文化防衛論(ちくま文庫)に収録されている。

「茨城大学五十年史」によると、学内は当時、体育・文化系サークルによる「学友会」と、寮や生協を束ねる「自治会」、両派に反発する「全共闘」の3団

体が対立。同年4月には、学友会と自治会の間で暴力事件が起るなど、学内は混乱が続いていた。

小野瀬さんは同年10月、

三島に直談判すべく、仲間と東京都内へ。早稲田大で開かれた討論会後の懇親会に紛れ込み、機を見て三島と対面し、こう訴えた。「大学の機能を正常化したい。学生を二喝してほしい」。

三島は「よし、分かった。行く」。日程も聞かず、首を縦に振ったという。

## ■真剣に生きる

その後、三島は東京・市谷の陸上自衛隊駐屯地で憲法改正を訴え、割腹自殺。県庁職員になっていた小野瀬さんは、県外への出張中に事件を知り、三島の死を「驚きと喪失感でいっぱいになった」と話した。

## ■会場包む熱気

討論当日は学園祭「茨苑祭」。講堂は学生や市民であふれた。そこへセーター姿の三島が訪れ、会場は異様な熱気に包まれた。

三島と学生は政治思想や死生観について激論。「今日死ぬかもしれないという気持ちだったらば、どれだけ人間は全身的な表現を毎日繰り返せるか」。三島は若者の生き方について熱弁を振るった。

終了後は水戸市大工町の割烹「魚政」で懇親会。学友会役員ら約30人で三島を囲んだ。さつくばらんな会話を花を咲かせ、最後に謝礼金を手渡すと「三島が二筆はないか」と尋ねてきた。店に借りて渡すと、謝礼金を包んだのし袋の裏に「三島由紀夫」と書き、ポケットトマネーを加えて「君たち頑張れよ」と返してきたと

三島さんとの出会いを、単なる思い出話で終わらせたくない。あれから55年、小野瀬さんは今も、三島が遺した言葉を胸に生きていく。

(藤谷俊介)

## 編集後記

本年度の総会にて「根本正顕彰会」の理事に選任されました。さっそく、会報「第102号」への投稿要請があり、あのような拙文を寄せた次第です。お恥ずかしい限りです。さらに、近々発行予定の「第103号」の編集後記もお願いされ、大変戸惑っているところです。会員歴8年余、理事としては1年にも満たない浅学菲才の後期高齢者です。荷の重さを感じております。

前置きはさておき、昨年5月には新型コロナが「5類」に位置付けられ、行動制限も緩和されました。お陰様で顕彰会の事業が当初の計画に沿って推進できています。私も新米理事として微力ながら関わってきました。そこで、「第102号」発行(7月6日)以降に実施してきた事業や活動等について列記し、一言添えることで編集後記に代えさせていただければと思っております。

- ◎ 8月 3日 第5回理事会…「根本正ゆかりの地を訪ねる旅(9/24)」・「根本正顕彰フェスティバル(10/2)」・マンガ「根本正物語」の増刷部数や配付先等について協議しました。
- ◎ 8月20日 中央公民館大掃除…根本正顕彰会を代表して2名が出席。和室を掃除しました。
- ◎ 9月14日 第6回理事会…24日当日の役割分担や配付資料作り等について協議しました。
- ◎ 9月21日 高齢者福祉センターにて24日当日に配付する資料の印刷と綴込みをしました。
- ◎ 9月24日 「根本正ゆかりの地を訪ねる旅」…参加者16名。埴町・大子町・旧山方町の関係史跡を巡りました。説明等は理事会のメンバーが分担。「奥久慈ゆばの里」にて会食。
- ◎ 10月 1日 「ピリングス氏への根本正寄贈品の里帰り展」を中央公民館にて11月末日まで開催しました。展示企画・準備等については、根本正治副会長さんが尽力されました。
- ◎ 10月 2日 根本正顕彰フェスティバル(戸多地区まちづくり委との共催)を開催しました。  
講演「郷土が生んだ不屈の政治家 根本正の生涯」 講師 山田正巳 会長  
〃 「水戸藩甲辰の国難と戸多地区の先人たち」 講師 仲田昭一 事務局長  
戸多地区の交流センター多目的室は、地域の熱心な参加者で満席かつ大盛況でした。
- ◎ 10月 6日 マンガ「根本正物語」贈呈式…市内全小中学校や各施設へ配付(515冊)  
市長室での贈呈式については茨城新聞(10月13日付)に大きく掲載されました。
- ◎ 10月26日 第7回理事会…「会報第103号」の内容と執筆分担等について協議しました。
- ◎ 11月23日 公開講座「顕彰会立ち上げ時の思い出」…講師 海野 徹 前那珂市長…顕彰会の設立には、前市長さん・現在理事の高畑さん(なかなか塾初代塾長)・現在理事兼事務局長の仲田先生(当時から顧問的存在)・山田さん(現会長)・横路さん(現副会長)・根本さん(現副会長)や多くの関係者の方々が尽力されたとのこと。以来、現在まで四半世紀に及ぶ顕彰活動を継続してきている熱い想いに感銘しました。講座終了後に第8回理事会を開く。
- ◎ 11月30日 「ピリングス氏への根本正寄贈品の里帰り展」の展示物の撤去と搬出・保管
- ◎ 12月21日 第9回理事会…本年度の事業を省みながら次年度の在り方などを協議しました。
- ◎ 6年1月15日に「第103号」を印刷、18日の第10回理事会で綴込みと郵送準備を予定。ちなみに、会報の編集は小堀理事さんが担当してくださっています。感謝です。

新しい年を迎えましたが、世界各地では地球温暖化に起因する自然災害が頻発しています。依然として紛争の絶えない国々もあります。ウクライナやパレスチナ自治区ガザなどの市街地の壊滅的な映像には胸塞がる思いです。死傷者数は増加の一途。一方、我が国でも多発する悪質な犯罪や不祥事、スキャンダルや金がらみで揺れる政界…等々。このような現況を天国の根本正先生はどうお思いでしょうか。元日早々には能登半島で大地震が発生しました。道路は寸断、家屋は倒壊、津波や大火も起きるといふ甚大な地震災害に、数多くの人命が失われました。今年こそは少しでも明るく穏やかな良き年でありますよう社寺に参詣し、祈願した矢先でした。突然の大災害に遭遇した被災者の方々の悲しみ、つらさ、苦しみ…はいかばかりでしょうか。心からお見舞い申し上げます。寒さ厳しき折、会員の皆様方にはくれぐれもご自愛ください。(細貝幸雄 記)